

<論文> 『平家物語』における後白河法皇

著者	川田 正美
雑誌名	日本文学誌要
巻	59
ページ	27-37
発行年	1999-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020041

『平家物語』における後白河法皇

川田 正美

1

『平家物語』は、単に平家と源氏の抗争だけでなく、院と内、寺院間の対立という、当時渦巻いていたあらゆる角逐を描いていることは早くより指摘されてきた¹⁾ことだが、これらの紛争すべてに関与してきた人物は、後白河法皇を置いてほかにない。しかしこの激動期を表徴する争闘どもを、彼がすべて大過なく乗り切ったかといえそうでない。

『平家物語』でまず取り上げられるのは院と内、すなわち後白河法皇と二条天皇の相剋であり、それは「二代后」で描かれる。すなわち、二条天皇が故近衛院の后に入内を求めるといふ、前代未聞の挙に出たことである。

天皇は、「院の仰をつねに申かへ」していたから、公卿僉議の否決も、更に法皇の反対も押し切って、それは決行された。ここでは、法皇も天皇の強引さになすすべもなかったことが記さ

れている。

ところで、延慶本では、院内確執の経緯が細叙されているので、二条天皇の法皇に対する反発も無理からぬことと頷ける記述となっている³⁾。だが覚一本は、延慶本のような形を避け、天皇の身勝手だけを特出することによって、法皇の被害者としての側面を際立たせたとみられるのである。

その二条天皇も永万元（一一六五）年に逝去し、後白河法皇は、

御出家の後も万機の政をきこしめされしあひだ、院内わく方なし。（殿下乗合）

とあるように、いよいよ意のままに政務を司ることができるはずであった。しかしそこに立ちはだかったのが平家であった。

二条天皇から譲位された幼い六条天皇時には後白河院政となり、その翌年の仁安元（一一六六）年、上皇の第三皇子・憲仁

親王（高倉天皇）を皇太子に立てた（「東宮立」）。これは、法皇が二条天皇の束縛から解かれ、政治の実権を握ったことを示すものであった。その翌年上皇は、東宮の生母・建春門院を女御とした。建春門院は清盛の正妻である時子の妹の滋子である。このことは、今度は、清盛の思惑が法皇の存在をしだいに覆う格好となってきたことを示している。

さて冒頭に述べた通り、『平家物語』は寺院間の紛争も扱っている。二条天皇葬送時の「額打論」がその例であるが、続く「清水寺炎上」では、「一院山門の大衆に仰て、平家を追討せらるべし」との噂が流れたことを記す。これは当の後白河法皇が否定したように噂に過ぎなかった。しかし清盛は法皇に警戒心を抱き、また法皇の近臣・西光は平家批判を洩らすといった具合に、ここでは法皇と清盛との不和が暗示されてくる。

ただし、反平家の感情は法皇の側近によるとされていること、すなわち二条天皇に対して法皇が弱い立場にあったのと同様、ここでも法皇は、陰に置かれた存在とされていることに留意しなければならない。

2

平家の専横は、摂関家への横暴（「是こそ平家の悪行の始めなれ」——「殿下乗合」）や、一方的な叙位除目（「只一向平家のまゝにてありしかば……」——「鹿谷」）等々、目にあまるものとなっていく。いきおい周囲の反発が強まる中で、平家討滅の密議が鹿谷の山荘でなされる。これには、平家に昇進を阻まれ

た藤原成親や俊寛、西光をはじめ、平康頼、多田行綱ら「北面の輩」が多く加わったが、そこには後白河法皇の姿も見られた。しかし彼については、『平家物語』では「或時法皇も御幸なる」とあるように、たまたまそこに居合わせたかのように描かれている（四部本では法皇の登場すらない）。そしてこの謀議がまもなく発覚し、平家の軍によって御所が包囲されたとき、法皇は

「こはされば何事ぞや。御とがあるべし共おぼしめさず。」（「法皇被流」）

としらを切っている。

このように反平家の陰謀は、「あは、これらが内々はかりし事のものにけるよ（「西光被斬」）と法皇自身がいうように、もっぱら栄達欲にかられた成親を首謀とする院の側近らの画策とされている。これは、先の「清水寺炎上」において西光の口を利用した方法と同様で、法皇の関与はどこまでも陰に回された叙述にとどめられていることが特筆される。

3

平家の専横と相前後して法皇を悩ませたのは山門騒動（白山事件）であった。

ことの発端は、加賀守の師高・師経兄弟の悪政に耐えかねて、白山社の末寺・鶴川寺の衆徒が神輿を奉じ、延暦寺に強訴したことであった。ところが当の兄弟への断罪が遅々としてなされ

なかったため、大衆の怒りは増大する一方であった。やむなく朝廷は、師高兄弟や神興を射た平家の家人を処罰するが、そればかりでなく事件の責は山門座主の明雲にまで及んでくる。これは、法皇の側近である師光(西光)・師高父子の讒奏によるものであった。

当時の寺院勢力の動きを歴史上で概観すると、山門と院庁との摩擦は毎年のように続いている。その中で『平家物語』が、この白山事件だけを取り上げたのは、西光との関連によるう。

いったい、『平家物語』に寺院勢力の抗争を書き込んだのが平家興亡の主題と無縁でないことは、『二代后』における院内の確執を扱ったことと同断である。すなわち、騒動の発端となった師高兄弟の父は師光(西光)であり、彼は院中のきり者として名を馳せたように法皇側近の代表格であった。法皇が兄弟の処罰をなかなかできなかったのは、西光に対する遠慮があったものと解釈できる。しかも『平家物語』は、一連の山門騒動を拡大させた張本は西光にあるとし、事態の沈静に手を拱いていた法皇の責任を膿化させているのである。

山門と院庁との軋轢には、成親や西光の二人が深く関わっていた。しかし『平家物語』では、鹿谷事件は成親に、白山事件は西光にと、それぞれ事件の発起人を割り当て集中させているのは、物語としての明快化をはかる、という構想に基づくものである。

けれども『平家物語』は、彼らを事件の表舞台に据えつつも、法皇の存在を忘れてはいない。すなわち白山事件のこじれは、法皇の「御裁断遅々」によるものであると再三繰り返されるし、

また西光、成親ら「北面の輩は以外に過分」であったのは「此御時」、つまり後白河法皇の時になってからであると記している。物語作者はこのように婉曲な形ながらも、法皇の責任を浮かび上がらせているといえる。

このような間接的叙法は、法皇の清盛に対する姿勢にも記されていて、それはもとより鹿谷の謀議に参加していたことに窺われた。しかし白山事件でも、明雲に対する唐突とも見える怒り(「法皇大に逆鱗ありけり」、「法皇の御いきどをりふかり」——但し、前文は屋代本に見えない)、そして山門座主の後任人事には直ちに寛快法親王を据えたこと(「座主流」)には、清盛が明雲を導師として出家したという深い関係から、また、寛快が後白河法皇の弟であることから、それぞれ法皇の思惑が知られるのである。

4

明雲流罪の処置に怒った大衆は彼を奪還する(「一行阿闍梨之沙汰」)が、事態を重くみた法皇は、またもや西光の進言を容れて叡山攻撃を企てる(「西光被斬」)。これには、山門と平家の結託をこの際分断させようとの意図が働いていたとみられる⁴⁾

だがまさにその直前、清盛は新たな行動に踏み込む。それが、鹿谷謀議の発覚による西光ら一連の捕縛であるが、その背景には、皇居を山門の攻撃から守る際、神興に矢を当てたことを理由に、朝廷が重盛の部下を処分したことへの不満があったようである⁵⁾。したがって、平家打倒の陰謀という口実の真偽のほ

どは疑う余地がある、との見方もできるのだが、物語では、反平家の一味であった多田行綱の内通で謀議が露見した、という構成になっている。通報を受けた清盛が、「さて夫をば法皇もしろしめされたるか」と直ちに問うているのも、法皇に対する疑惑の表れとみられる。だからこそ、事件に対する法皇の「こは何事ぞ」というあいまいな対応を聞くにつけても、「さればこそ。行綱はまことをいひけり」と、清盛は膝を打ったのであろう。

こうして捕らえた西光から平家打倒の企図を自白させた清盛は、成親をも捕縛する（「少将乞請」）。ところが法皇はその報に對しても、「あは、これらが内々はかりし事のもれにけるよ」と思うばかりであったとし、相変わらず物語は、彼自身の関与に言及しようとしなない。そして、連行された成親の子・成経に涙を流す法皇の姿を、作者は「かたじけなき」とまでいうのである。

さて鹿谷事件を機に、清盛は法皇幽閉を決意するが、彼がそこまで思い詰めたわけは、「教訓状」で吐露される法皇への不満——保元・平治の両乱で朝廷へ奉公したにもかかわらず、側近の讒言のままに平家打倒に参画したという——に明確に示される。急を聞いてかけつけた重盛に對して清盛は、「成親卿が謀反は事の数にもあらず。一向法皇の御結構にて有けるぞや」と、ここでも事件の張本が法皇であることに確信を持っていることが注目される。

このように物語は、法皇を幽閉しようとするほどの清盛の専制を強調するのだが、そこにまで至った彼の行動をつぶさに併述することによって、かえって法皇の虚偽性を浮上させて

いるのである。

法皇の幽閉は重盛の反対にあつて一時は断念されるものの、清盛と法皇の冷戦状態が続く中で、治承二年、高倉帝の中宮・徳子（建礼門院）の懷妊が伝えられる（「敕文」）。ここで「東宮立」の時と同様、清盛と法皇の思惑が交錯するのだが、ここでは安産を一心に祈禱する法皇の姿（「千手経をうちあげくあそばされける」と、男子の安産を手放して喜ぶ清盛の一途さ）が対照的である。

激情的であつた清盛が人のよい人間味を見せるのに對し、これまで内面を表さず、つかみ所のなかつた法皇が異常なほどの熱意をみせる、というようなこれら二人の対照的な描き分けには、今度は清盛が、ゆくゆくは法皇に覆われていく前途を暗示させるものがある。

5

以後、物語の筆はしばらく、鹿谷事件の罪で鬼界ヶ島に流された俊寛らの顛末に費やされるが、それも決着して再び平家に話が戻ると、その初めには重盛の死が描かれる。ことあるごとに清盛を諫めてきたこの嫡子の死で、抑制の糸が切れたように清盛はさっそく福原から都に兵を従えて押し入ろうとする（「法印問答」）。その噂に慌てた法皇は、静憲法印を使者として清盛の本意を探らせる。

清盛がなぜ法皇に對して執拗に反発するのが『平家物語』ではわかりにくいことが先学より指摘されている⁶⁾が、読者は、

先の法皇幽閉の決意の弁（「教訓状」）と併せ、ここでようやく彼の不満が理解できる仕組みになっている。

この清盛の不満の激烈な吐露に対し、法印はさすがにそのほとんどの否定できなかったが、鹿谷の陰謀を法皇が容認していたことについては、

「近臣事をみだり、君御許容ありといふ事は、某臣の凶害にてぞ候らん。」

と言っており、ここでも陰謀の元凶は側近にあるとされている。しかし理は清盛にあることは歴然としており、それは当の法皇自身さえ法印の報告を聞いて、

道理至極して、仰下さるゝ方もなし。

と、清盛の主張に反論できないのである（「大臣流罪」）。いったい、作者の意図と作品の結果との乖離という現象は、文芸一般によく見受けられるところであるが、この『平家物語』もその一つであるといえる。当該箇所などはその好例で、悪行者として造型されたはずの清盛に正当性があり、神聖不可侵の法皇にかえって、虚偽性が漂っているのである（「教訓状」での清盛と重盛の関係もそれに当たろう）。

法皇の近臣の解官に続いて、清盛は遂に法皇その人の幽閉に踏み切る（「法皇被流」）。ところが平家の軍勢に包囲された際、法皇は

「こはされば何事ぞや。御とがあるべし共おぼしめさず。」

と開き直っている。これではいったい、先の「道理至極」という肯定は何だったのかということになる。「法院問答」で挙げた数々の不満事項に限ったのかとか、あるいは法皇自らが認めるところの「政務に口入」していたことに対する疑義であろうか。いずれにせよ、肝心の謀議の件に対し、法皇自身はまるで意に介していないようで、物語は彼の責任を不問にしているといえる。そして以後しばらくは、もっぱら清盛の強行した法皇遷幸（「城南之離宮」）の不当性が強調され、それに伴う法皇の慨嘆が綴られていくのである。

治承四年、高倉天皇から僅か三歳の言仁親王へという譲位も、外祖父となるがための清盛の画策で、法皇の意思はまったく度外視された。

こうした中で、高倉上皇の最初の社参が異例の厳島神社で行われる（「厳島御幸」）が、『平家物語』はこれを清盛懐柔のための高倉上皇の意志によるものとし、参詣途次の鳥羽殿における法皇との対面に大きく筆を費やしている。これは清盛と、彼のために不遇をかこつ上皇・法皇との対立構図を際立たせるのが狙いとみられる。そして法皇に関してはここでも、生臭い話は措いて亡き妻・建春門院を想いながら涙に沈む彼の姿が描かれているのである。

しかし清盛の謳歌もここまでであった。厳島神社の参詣は、有力な寺院勢力を刺激し、また法皇の第二皇子以仁王を擁立しての、園城寺を中心とした平家討滅の謀議が進展していた。この計画もまもなく鎮圧されたが、事態を重く見た清盛は、寺院勢力の影響が少なく、また院政から脱却した独自の軍事政権を確立すべく福原への遷都を強行した。

しかしこの間東国では、宿敵源氏の蜂起という重大な状況の転化が兆していた。『平家物語』ではこの経緯を、高尾の文覚上人が伊豆国へ流されていた頼朝に挙兵を勧め、福原在住の法皇からその院宣を受け取るという筋立てにしている（「福原院宣」）。文覚が幽閉の身である法皇からどのように院宣を引き出し得たのかははっきりしないが、法皇が要請されるままに平家討滅を即決したというのが肝要なところであろう。

さて福原遷都は、貴族たちの反発に加え、頼朝に続く義仲の挙兵など相次ぐ内乱の勃発から、僅か半年で遷都を余儀なくされ、さらにその暮れの南都消失によって、平家に対する不評は決定的となった。

こうした中で法皇は幽閉を解かれ、翌年には再び政務を執ることになったが、それは養和元年に、高倉上皇が夭折したことによるものであった（「新院崩御」）。法皇の落胆はひとしおであったが、これを機とした法皇の院政再開は、周囲の大きな情勢の変化の中で、平家の独裁政治に終止符が打たれたことを意味

した。

清盛と法皇の力関係は逆転した。清盛が法皇を慰撫すべく、自分の娘を差し出したことなどはその好例である。

そして同年二月、一門存亡の危機が孕む中で清盛は死去する。病臥した彼の口からは、早く頼朝の首を刎ねよ、との言葉はあっても、法皇の存在を気にするそれはなかった。

強力な政敵が潰えて、法皇がまず訪れたのは院の御所法住寺であった（「祇園女御」）。そして南都の僧綱らを本官に復し、大仏殿を再建した。流されていた大臣らは帰洛し、御前での演奏会は喜悦に満ちあふれていた（「嘆声」）。しかしこの養和二年は、源軍の行家（「洲俣合戦」）や義仲の軍勢が平軍と戦い、加えて前年からの大飢饉に見舞われる⁸⁾という不安定きわまる世情であった。国内は、東国の頼朝、北陸の義仲、西国の平家の三者が互いににらみ合っただけでなく、均衡状態を保つことになった。

こうした中で同年四月、法皇が日吉社に参詣した際、山門の僧徒が法皇を擁するという風聞が立ち、宗盛が重衡に法皇を迎えにやるという事態が起こったことが記されている（「横田河原合戦」）。

山門の法皇擁立は、巻一「清水寺炎上」を想起させる事件であるが、違っている点も見られる。それは、四部本・延慶本ではこの根拠のない流言に対して、法皇が自らの関与を否定している（「法皇大ニ驚セ御シマス」）のに、覚一本ではこの噂を、

法皇が山門大衆に平家追討を命じた、というようにはつきりと変えていることである。

清盛亡き後、法皇は各地に勃発する内乱の平定を、平家に委ねざるを得ない状況にあった。しかし一方で、平家の専横に周囲の不滿が渦巻いていた中で、このような法皇による平家追討の流言が飛び交った、とするところに、法皇もはや平家を見限り始めたことがほのめかされていたとみなされよう。

8

寿永二年に入ると山門勢力は義仲と提携し、さらに行家・行綱も京都に向かつてきた。こうして平家一門はついに都落ちを余儀なくされることになるが、ここで法皇はついに平家を見限り姿をくらましてしまう(「主上都落」)。彼は鞍馬を経て叡山に登ったのだが、再び「清水寺炎上」と比較すれば、「法皇も急ぎ六波羅へ御幸な」った点も異なっている。

すなわちその時の法皇は、周辺の騷擾の中で平家の軍事力にわが身の安全を委ねようとしたのだが、ここではもはやその平家を見限り、義仲と組んだ山門勢力をあてにし始めたと思われるのである⁹⁾。

さて物語は、平家一門の一連の都落ちのさまを描いたあと、叡山から下山した法皇が七月、義仲・行家に平家追討を命じたことを記す。源軍占領下での法皇の最初の仕事は、平家に主上と神器の返還を拒否されたがために不在となった天皇の空位を埋めることであった。

この新帝には、都に残されていた高倉上皇の二人の皇子のうち、法皇になつた四の宮(後鳥羽天皇)が選ばれたという他愛ない経過が、諸本いずれにも記されている。ただ延慶本は、その候補を選定するまでの法皇の思い煩う姿が描かれている。そうした法皇の苦悩する姿をば、諸本は法皇像を築くに当たってあえてよけたものであろうか。

それにしてもこのように、当事者も戸惑うような変則的事態の勃発をも物語は、「平家の悪行」によつたものとするのである。先にも触れたように享受者には、それが大義名分を要する法皇の強引な措置であることが明瞭に伝わるだけに、作者の意図と物語の結果との乖離はいっそう露わになってくる。

さて法皇は、平家追討を義仲に命じた際、鎌倉の頼朝に対して入京を促したことが四部本にみえるが、彼は動こうとしなかった。しかしその間、義仲の評判はしだいに悪くなり、法皇は一途に頼朝に期待を寄せざるを得なくなった。ここに、今度は法皇と頼朝の駆け引きが展開されることになる。その最初が、物語では、頼朝が鎌倉に居ながらにして征夷大將軍の院宣を受ける場面に現れる(「征夷將軍院宣」)。

頼朝は院の使いを丁重に迎えるが、この機を逃さじと、義仲らの追討の院宣も要請する。彼はまず、平家が都を落ちたのはわが威勢に恐れたがためであると胸を張り、しかしその後、今度は義仲が思うままに振る舞って自分の命に従わない状態を述べる。したがって、そういう輩を追討する院宣が発せられるのは当然だというのである。「いそぎ追討すべきよしの院宣を給はるべう候」の「べう候」には、この語調がみなぎっている。

泰定がその後京へ帰り、鎌倉での出来事をどこまで、またどのようにに院の前で報告したのかは明らかにされていない（「猫間」）。にも拘らず、法皇は「御感ありけり」としているところにまた、法皇の得体の知れなさを漂わす効果を生んでいるのである。

9

さて木曾義仲は「朝日の將軍」という院宣を受けたものの、その野卑さがゆえに都での評判を落としていく。そうした義仲軍の行状を見兼ねて法皇は、鼓判官知康を使者に、部下の狼藉を鎮めるよう申し入れる。だが、かえって義仲に揶揄されて戻った知康は、義仲の追討を法皇に進言し（「鼓判官」）、法皇もその気になる。義仲追討の院宣に驚き、彼を懸念にたしなめる今井兼平に対し、義仲は、部下の行動は軍馬用の餌草、兵糧米のためであると、その正当性を主張する。

ところが物語は結局、知康の議を容れた法皇が動かされたというように、鹿谷事件と同様、側近に事態の責を帰すというパターンを繰り返している。だがここで、法皇の対義仲戦に際して徴集した戦力をみると、「しかるべき武士には仰せで」「山・三井寺の悪党ども」が当てられている。「しかるべき武士」とは不明瞭な表現だが、近くは近畿一帯から遠く関東に及ぶ広範な勢力を指すのであろう。

しかしながら、関東勢の中軸たる頼朝については未だその埒外であつたろう。というのも、彼は征夷大將軍の院宣まで授け

られながら、肝心の義仲追討の院宣は結局受けられなかったこと、先にみた通りだからである。そしてこの期に及んでも、そうした頼朝の勢威伸長を警戒してか、なお公式には、山門・寺門の僧兵らのみに呼びかけたところに法皇の慎重さがみえるのである。

しかし、しよせん寄せ集めの軍勢でしかない官軍側は、みるも無惨な敗北を喫さねばならなかった。味方についた公家や武士からは多数の死者を出し、法皇は五条内裏に、天皇は閑院殿に押し込められてしまう。さらに義仲は、前関白基房の娘を妻にし、多くの公卿殿上人の官職を停めるに及んだ。

こうした事態を招いた元凶は、知康の皮相な進言を盲目的に受け入れ、頼りない戦力で義仲に挑んだ法皇その人にほかならなかった。ここにきて物語はようやく法皇に対し、非難の鋒先を向けずにはいられなくなってきたおり、それは延慶本に顕著に見られる（「木曾六条川原に出て首共懸事」、「宰相修憲出家して法皇御許へ参事」）。

しかし、そうした法皇批判は延慶本だけにとどまっている。これまで物語は清盛が存命中は彼を悪者にして、その専横に悩む法皇の姿を描けばよく、また清盛への批判的言動は法皇の側近が負い、しかも彼らへの処分もまた、清盛の手に委ねられた。しかるに、その清盛亡き後に登場した義仲の横暴を鎮めるのに、物語は知康という側近を登場させ、対義仲戦の失敗も彼のせいにするという従来と同様の方法をとった。

けれども、源氏という新たな武力を有する強敵を倒すのにどのように既成の武力を操るか、今度こそ法皇の力量が問われる

時機であつたのに、彼はそれをしくじつた。そうした法皇の限界を押しやって、また知康という側近のせいになしようとしたところに、『平家物語』の方法のマンネリ化が見て取れるのである。

10

こうした義仲の暴状を知つて鎌倉の頼朝は驚いて、今度は義経・範頼の大軍を京へ派兵する。物語には触れられていないが、実はこれより先、頼朝はいわゆる「寿永二年の宣旨」によって東国に対する事実上の支配権を公認させ、法皇との連携がなされていた。法皇の心ははや、頼朝の派遣する義経・範頼軍に傾いていたわけである。彼らが六条殿に着くや、法皇は「大に御感」を示している（「河原合戦」）。窮地に陥つた義仲は、屋島の平家に講和を呼びかけたが拒否され、義経・範頼軍に追われるままに法皇への暇乞いも慌ただしく北陸へ敗走し、近江の粟津で戦死を遂げる。

法皇の次の課題は平家の追討であつた。しかし法皇は、範頼・義経に平家との決戦でなく三種の神器の返還を命じ（「三草勢揃」）、また後の屋島院宣でも、神器と重衡の身柄との交換条件を出している（「八嶋院宣」）。これは天皇の象徴品を無事に取り戻すため、和戦両様の構えでいかなければならぬ法皇のジレンマの反映であつた。

こうした朝廷内の葛藤をよそに、義経・範頼は平家を一の谷に追い落とす。都に凱旋した両人が願い出たのは、一の谷で討たれた平軍の首の大路渡しであつた（「首渡」）。法皇はこれを公

卿僉議にはかるが、みな先例のないこととして反対する。兩人の重ねての要請に首渡しは遂に許可されるが、二度目の詮議に法皇の名は見えない。

また、屋島に敗走した平家の壊滅を揚言する義経に、法皇は「相構て、夜を日につぎて勝負を決すべし」と檄を飛ばすが、これが屋代本には見えない。

この辺りの義経をめぐる諸本の記述は、先例のない公卿の首渡しを奏聞したり、検非違使・五位尉に任せられ（「藤戸」、流布本では「大嘗会沙汰」）、その権威をかさにきる義経の傲慢な態度に対する、都人たちの心情を反映するものかもしれない。

義経・範頼は遂に、平家を屋島から壇の浦に追い詰め壊滅させることができた。そのため宗盛以下の生け捕りになった平家一門もまた、大路を引き渡されることになる（「一門大路渡」）。その行列を法皇までもが車から見物したが、「さしも御身ちかうめしつかはれしかば、法皇もさすが御心よはう、哀にぞおぼしめされける」という一文も屋代本にはない。この一門の大路渡しは、もとより先の「首渡」に通じる位置づけができるが、一方、自ら平家追討の院宣を出しながら、その結果を目のあたりにして心を痛めるという法皇の内的矛盾が表出した箇所とも見られるわけで、覚一本はそのような法皇像を映し出しているのである。

平大納言時忠の流罪にも、法皇は頭を痛めた（「平大納言被流」）。時忠は故建春門院の兄にあたっていたし、彼の娘は平家追討の功労者たる義経の妻でもあつたのだが、なにせ時忠は平家の大物ゆえ免罪にはできなかった。その一方で、屋島の平家

に神器を返すように、との院宣の使いに、焼印を押すという彼の行状に対する憤りもあったから、としている延慶本のような記述もある。

ところが屋代本・覚一本でその部分(巻十「請文」)をみると、法皇はその押印に笑っている。しかるに延慶本ではその笑いがなく、そこに該当する箇所では、その使者をめぐって

院宣持て下りたりける御壺の召次花方が頬に浪形と云火印を指て汝をするには非すとそ宣ける、されは誰を申けるそ、院を被申るか、

とあり、「法皇の御気色心よからすして被流給けるも此故とそ聞へし」と整合性を保っている。屋代本・覚一本では矛盾があるといえるが、それだけ法皇の揺れ動きを浮き彫りにしている、ともみられよう。

11

平家を追討した義経は、梶原の讒言によって頼朝から追われる身となり、やむなく九州に落ちようとする院庁の下文を要請する。法皇は頼朝の意向を気にしながらも、公卿僉議により、諸国への下文を下し、義経はこれをもって静かに都を去る(「判官都落」)。ところが、代わって鎌倉から北条時政が上京すると、法皇は今度は義経追討の院宣を下す¹⁰⁾。このような法皇の変節に対しても物語は、

朝にかわり夕に変ずる世間の不定こそ哀なれ。

と、やはり法皇への批判を避けている。

しかしこうした法皇の便宜的態度は、頼朝に「日本国第一の大天狗」と非難されることになり、以後法皇は、頼朝の君臨する鎌倉政権に譲歩を重ねていく。すなわち、総追捕使の任命や守護・地頭補任の勅許など、「過分の申状なり」としながらもこれを認めざるをえない有様となったのである(「吉田大納言の沙汰」)。

頼朝は、徹底的な平家の残党刈りと奥州征討を完了し終えた後の建久元年にようやく上洛したが、『平家物語』は、その二年後の建久三年に法皇が逝去したことを一言だけ記す。一代の専制君主の死としてはあまりにもあつけないが、翻って『平家物語』全体を見渡すと、物語後半の法皇には、前半ほどの精彩が見られない。やはり、法皇が権謀術数の限りを尽くして正対した相手は清盛や山門だったのであり、時が移り代わって登場した頼朝に対しては、その代行者たる義仲・義経の応接に振り回され、結局は頼朝のペースに巻き込まれて生涯を閉じたといえよう。

12

『平家物語』の最後の場面(伝本によっては「灌頂巻」として一括される)は、平家一門で唯一の存命者となった建礼門院の消

息を追うための段であると共に、後白河法皇に一連の戦乱を振り返らさせる意味をも有している。そのためか、特に覚一本の「大原御幸」には、法皇関係の増補が数多くみられる。

ところが女院が、訪れた法皇を見ての言葉が、覚一本では

「……いまかゝる御ありさまを見えまいらせむずらんはずかしさよ」

とあるのに、屋代本では

「……聖衆（ノ）来迎ヲコソ待ツルニ思（ヒ）ノ外ニ法皇ノ御幸成（リ）タル口惜サヨ」

と、長い間抑えていた怨念を噴出させている。

また覚一本は、屋代本・百二十句本に見られるような、法皇がその後もしばしば訪れたとする記事（法皇モ其後ヨリハ常ニ御訪有ケルトカヤ」＝屋代本）を削除し、法皇の一行がしだいに遠ざかった時点で（還御もやうくのびさせ給ひければ）、一心に先帝らの往生を祈念する女院の姿を記している。

「灌頂巻」は、女院の死を静かに迎えさせるべく設けられた巻のはずであったが、右のように、一門を滅亡に追い込んだ法皇との出会いによって、女院に怨憎会苦を想起させる生々しいドラマとも読み取れる結果になっている¹¹⁾。このようにみると、「六道之沙汰」における女院の六道体験を聴いて落涙する法皇のその涙も、われわれが物語中で長らく追ってきたのと同質の、偽

善に満ちたものに映ってきてしまうのである。

しかし右に見た屋代本から覚一本への女院像の変化には、政変や戦乱において生臭く発散された法皇のそうした虚偽性をば、しだいに厚く覆ってしまっているといえるであろう。

（注）

- 1) 時枝誠記『平家物語はいかによむべきか』に対する一試論
- 2) 正木信一『平家物語論考』巻一・総論（私家版）
- 3) 紙面の制約上から、以降も、延慶本の本文引用を極力略させていた
- 4) 富倉徳次郎『平家物語全注釈』
- 5) 佐々木八郎『平家物語評講』
- 6) 石母田正『平家物語』
- 7) 『吾妻鏡』養和元・九・四
- 8) 『百鍊抄』養和元・六
- 9) 安田元久『後白河法皇』
- 10) 『玉葉』では、これを「法皇の過怠」であると批判している。
- 11) 前掲2・灌頂巻（近刊）、正木信一『平家物語―内から外から―』

（かわだ まさみ・一九六六年卒）